

アメリカ科とその後——雑感

第 25 期 梅本 哲也 (1977 年卒業)

私がお他 6 名の学生と共にアメリカ科に進んだのは昭和 50 年のことである。新川健三郎先生の「アメリカ史」、嘉治元郎先生の「アメリカの経済」、亀井俊介先生の「アメリカ文学」、本間長世先生の「現代アメリカ思潮」といった科目が並んでいた。非常勤講師であった阿部齊、猿谷要、富田虎男、長沼秀世、正井泰夫の諸先生、そしてフルブライト交換教授であったハンコック先生の授業をも受けた。

新川先生からは、原則として毎週、「アマーフト・シリーズ」所収の文章を要約するという宿題が課せられた。アメリカ研究資料センター（現・アメリカ太平洋地域研究センター）で資料を借り出し、英文の解釈に時間を掛けた。亀井先生の授業では、夏期に箱根、冬期に検見川で合宿を行った。同級生ともども本間先生、猿谷先生の自宅にお邪魔したことも思い出される。

本間先生には大学院博士課程の途中まで指導教官を務めて頂いた。昭和 55 年、私はフルブライト YKK 奨学生に採用され、プリンストン大学の大学院に留学することになった。駒場の大学院では交換教授・ベンジャミン先生の授業にも出ていたが、プリンストン在学中に 1 度、ニューヨーク州にある同先生の住まいを訪問した。

卒業論文はジャクソニアン・デモクラシー、修士論文は現代米国の政党改革にそれぞれ関するものであったが、次第に「アメリカ研究」が学問として成り立つのかという疑問が募り、米国留学中に専門を「国際政治学」に切り換えた。我が国の安全保障論議を主題とする Ph. D. 論文を書き、帰国してからは核兵器を巡る国際関係の探究に精力を傾けた（『核兵器と国際政治』刊行）。

ところが、平成 14 年に本間先生が文化功労者に選ばれると、その祝賀パーティーが非常に気持ちの良いものだったことをきっかけに、再び「アメリカ研究」に類する勉強がしたくなった。それ以来、国際政治学に軸足を置きつつも、米国の政治動向及び外交・安全保障政策の特質に改めて注意を向けるようにな

り、現在に至っている（『アメリカの世界戦略と国際秩序』『米中戦略関係』刊行）。

上に名前を挙げた先生方の学恩は言うまでもないが、アメリカ科関係の人々にはそれ以外にも様々な形で世話になった。卒業論文や修士論文のタイプ打ちを手伝ってくれた同級生がいた。私が学部、大学院に在学していた当時、アメリカ科の助手であった中里明彦先生には、後々まで折に触れて酒食を共にする機会を与えられた他、Ph. D. 論文の作成や書籍の刊行に際しても助力を受けた。有賀夏紀先生（やはり嘗てアメリカ科の助手であった）の手配により、その所属する大学で非常勤講師を務めたこともある。

私は駒場で2年間、社会科学科の助手として勤務した後、平成元年に静岡県立大学に移ったが、同級生の誰ともその前後から事実上連絡が途絶えている。

同窓会のホームページが交流再開の縁よすがとなれば幸いである。

（記憶に曖昧なところがあり、記述が正確でないかも知れません。）